

令和6年4月7日

南の風第55回全国ミニバスケットボール大会特集号Ⅱ

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

嵯岐リトルソニックスのオフェンスについてです。スターターは0番、2番、3番、11番、14番のラインナップです。

嵯岐は1Qの立ち上がりから抜け目がありません。トスアップ前、ジャンパーの3番がサークルの後ろにいた14番とアイコンタクトします。「目でボールいくよ」と合図し、14番が頷きます。14番は自分のDefを軽くシールし、タップされたボールに跳びつきキャッチします。タップした瞬間、3番はスペースを確認しながらゴール下にダッシュします。14番はドリブルで攻め、ゴール下の3番にループパスです。これがまた絶妙で、3番がジャンプして届く空間へのパスでした。3番はパワードリブルからジャンプショットで得点です。(取り組むチームはありますが、きちんと成功させるところが凄い)

すかさずオールコートのプレスから、パスカットした3番がドリブルでリングを攻めます。ゴール下シュートと思わせDefが反応すると、逆サイドから走り込んだ0番にエアーステップして得点を重ねます。

基本、1Qの嵯岐の得点パターンは、トランジションによるもの(相手の得点後のファーストブレイク、パスカットからのドリブルショット)と、ブレイク1(ペイントドライブから、ヘルパーの動きを見ての攻め)、そしてトップオブザキーよりも高めからのDHO(ドリブルハンドオフ)からの逆サイドへの合わせでした。DHOでボールを動かし、逆サイドからのリフトに合わせた反対サイドのダイブといった基本プレーでした。

基本プレーの組み合わせなのですが、やり切るところが凄いです。1Qが終わり20-5です。

2Qは1番、4番、5番、7番、8番のラインナップです。オフェンスパターンは1Qと変わりません。プレスディフェンスからのパスカットトランジション、DHOや逆サイドへのパスからのペイントドライブ、そこからの合わせです。オフェンスに停滞することが少なく、ボールマンのドリブルやパスに周りが連動する攻めです。一つ付け加えると、ボールがどちらかのウイングサイドに落ちた時、逆サイドからのインフロントカットの合わせです。その時に、インフロントカットしやすいようにDHOした選手やパスをさばいた選手が、カットする選手のDefにダウンスクリーンに行きます。もし入らなければ、空いたスペースにもう一人がカットしてペイントを攻めるといったプレーです。2Q終了34-13。

3Qは、0番、3番、7番、11番、14番です。このQはハーフコートのオフェンスに約束のフォーメーションを入れていたようです。パスやDHOでボールを動かした後、基本的にパスされた逆サイドからポストで合わせたり、ランニングミートからペイントドライブしたりした攻めです。さらに7番のゴール下エアキャッチシュートや、14番のゴール下3番へのホットラインパス(3番がジャンプした最高点へのパス)は高校生並みとも言えます。

嵯岐の攻めは、コート全員が躊躇する瞬間がほぼありません。レシーバーは、ボールを持つ前からのやるべきことの判断ができ、Defの反応によってオフボールマンとの合わせや1on1の攻めをチョイスしているようでした。

またエンドラインからのナンバープレーも、自分たちでサインを出し合い決めていました。スロットラインスタックやフリースローラインパラレルプレーで着実に得点していました。特集Ⅲ号に続けます。